

女「わたしは偽らない貴方の心をすっかり見ました。どうして貴方だけを地獄にやる事が出来ませう、どうぞわたしも一緒に連れていって下さい」(情熱に瞳が燃えて来る)

男「有難う、よく言ってくれた、俺達は喜んで地獄へ落ちて行こう。地獄がなんだ燃えさかる業火に責めさいなまれもだへ苦しみながら永久に生きるのだ」

(二人相抱いて空間を見つめる、戸を打つ音次第にはけしくなる遠く太鼓の音かすかに)

——一九三四、十一、作——

ベツトで溺死した男

圖・二田中富士雄

水玉模様のワイシャツを買ったのが病みつきになつて、彼氏はすっかり水玉マニアになつてしまつたのである。所がその水玉氏が昨夜突如天国にゐつちまつたのである。それがとても變な死に方なのである。ベツトの上で溺死してゐたのである。溺死ですぞ。

水玉氏の無二の親友である僕は、彼氏死去の報に直に彼氏の部屋を訪づれたのである。

彼氏が水玉の蒐集をやつてゐるのは先から知つてゐた。ワイシャツ四つ。ネクタイ二つ。マフラー。スカーフ。便箋。ベルト。サスペンダー。靴下。スリッパ。ハンカチーフ。タオル。日本手拭。手拭袋。サル又。サル又までもですぞ。先づ一寸と頭に浮かんだ、だけでもこんな所だ。

彼のの水玉マニアなることを充分知つてゐる僕も彼氏の部屋に一步足を踏み入れて、おどろいた。部屋の内中、水玉だ。水玉の洪水だ。壁紙。床の敷物。カーテン。テーブルクロス。クッション。布団。枕。及びそれらの上覆ひ。ビヂヤマ。e.c.c. 皆水玉模様だ。

彼氏の母は「この子は「出来るものは全部水玉にした」と、昨夜はとても、喜んで寝に付いたのですが」と暗然としてゐた。

僕は床の上に正しくそろえてある、彼氏のスリッパ(勿論水玉だ)の上を赤い小さな「澤蟹」がはいまわつてゐるのを見付けた。

水玉氏は矢張り溺死したのだ。

變以後

贈、T B 映画研究會文藝部と脚本部へ(昭和九年十一月)

圖・二平松幸彦

唯自分一人が満足したのではない、と思つて見ると光秀は何となく自分と云ふものが頼母しく思はれないでもなかつたのでした。

きつとやつて見せる——とさう思ひながら、帯刀を龜山の城の暗い行燈にぬいて見た事も今になつてみれば思ひ出の一つとなつて居りました。でも秀吉は何と言ふだらう、毛利勢と和睦を結んだことは聞いたけれども、高谷兵藏の持ち歸へる返書が待ち遠しいのです。

そうすぐには返る筈はないと思つては見ても、でも秀吉は光秀の氣持をよく分つて居てくれる筈なのでした。家臣に對して如何に信長が横暴であつたかと云ふ事については、未だ秀吉が京に居た頃に彼も良くそれを身に感じて居た事に違ひなかつたのです。「人はどうせ一度は死ぬものだ」と云つては見ても、むしろ益々横暴が劇しくなるのではないかとさへ思はれて來たのでしたから。どうせ一度は死ぬものならと光秀は思つたのでしよう。

然し、光秀によつては暴壓無道の信長も主人には違ひなかつたのです。それに叛いた自分は反逆者だ、不忠者だ。それはよく光秀には解つて居たのでした。

反逆者の天下が続くものか、又續かそうとは思つて居ない。秀吉が中國から歸へつて來たら黙つて渡すまでだ、戦つたつて無駄だ、自分が負けるからではない。きつと勝てる、この光秀には自信がある。然し誓へ勝つた所で何にもならない、それだけ無駄だ。ですから光秀は高谷兵藏をわざわざ中國に居る秀吉の所へ走らせたのだ。